

主 題：神の方程式 1

聖書箇所：コリント人への手紙第二 9章6－15節

2009年が始まるに当って、私たちの社会は非常に大きな問題を抱えています。百年に一度と言われる経済的な困難の中に私たちは置かれているのです。多くの人が自分たちの生活に関して、自分たちの経済的な状況に関して多くの心配をしています。実際に、私たちは昨年末、そして、今年にかけて、すでに多くの大企業の倒産を見聞きし、多くの個人資産家たちが膨大な額のその資産を一瞬にして失ってしまうという、そのような姿を見て来ました。この日本においても、多くの人たちが職を失い、多くの人たちがこれからどのような生活をして行くことができるのかと、自分たちの経済的状況に思い悩むという、そのようなことを私たちは毎日の報道の中で見えています。このような中であって、人々は何とかして自分たちが生活することができるようにといろいろ考えて生きています。また、多くの人たちは何とかして自分たちが経済的に安定した状況を作ろうと考え、願わくは、単に安定しているだけではなく、より経済的に繁栄することができるように、成功を治めることができるようにと、そのように願いながら生きている訳です。これまでも多くの本が書かれて来ました。それらの本は「こうすれば私たちはお金持ちになることができる」と教えます。資産を増やして行くためにはどうすれば良いのか、そのような本が書店にはたくさん並んでいます。そして、そのような本だけでなく、多くの専門家たちがそれぞれのことばや考え方に基づいて、「こうすれば私たちは繁栄の内に生きて行くことができる」ということを言い続けています。私たち人間は皆、願わくは、そのような繁栄の中で成功の中で生きることができればと考えます。何とかして成功を治める秘訣を知りたい、もし、繁栄に至る方程式があるなら私はそれを知りたいと、そのように考えているだろうと思います。けれども、残念ながら、少なくとも私たちの周りを見たときに、たくさんの専門書が書かれ、たくさんの専門家が様々な意見を言いながらも、そのように必ず繁栄に至るという方程式を私たちは見つけたことがありません。

でも今日、皆さんにその方程式をお伝えしたいと思います。皆さんが必ず、繁栄のうちに生きることができるその方程式、それはこの聖書の中に書かれています。皆さんがどのような経済的な状況の中で生きて行くのか、皆さん、神は皆さんが繁栄のうちに生きて行くことを願っておられ、そのための計画を持っておられます。そして、その繁栄、その成功を治める方程式を聖書の中で私たちに与えてくださっているのです。確かに、お金のことは教会の中では余り話さないことかもしれません。特に、日本の教会においてお金の話をするというのは、どうも敬遠されがちなことかもしれません。今日は、もしかすると、後で様々な非難を浴びるかもしれませんが、敢えて、皆さんとこの話をして行きたいと思えます。なぜなら、聖書はお金について非常に多くのことを語っているからです。実際に、「お金」と訳すことができることばが、聖書の中には150回ほど使われています。また、金や銀、様々な財産や資産を表わす事柄を加えるなら、新旧両約合わせて、実に750回を超える数のことばが書かれています。神は経済的な事柄に関して無関心ではないのです。私たちが毎日の生活をするに当たってよく分かっていることは、私たちはお金無しに生きて行くことはできないということです。神はそのことをよくご存じなのです。そして、私たちがそのお金をどのように使い、どのようにそれを得て神のために仕えて行くことができるのかということ、神は私たちにしっかりと教えようとしているのです。

確かに、聖書は経済的繁栄の教科書ではありません。けれども、この聖書は私たちに原則を教えてください。神は、私たちクリスチャンが経済的な繁栄のもとに喜んで神に仕えて行くための方程式を、私たちに与えてくれています。ですから、今日と、そして、来週の日曜日、聖書的な原則に基づいて皆さんがどのように経済的に豊かになって行くことができるのか、そのことについて話したいと思えます。皆さん関心がありますか？これから皆さんとごいっしょに見て行くこと、そして、来週、皆さんと最後までこの箇所を見て行くときに、皆さんはきっと驚かれるだろうと思います。そして同時に、皆さんの信仰が大いに試されるだろうと思います。そして、それゆえに、皆さんの生涯が、特に、この経済的な事柄に関して、また、それゆえの神との関わりに関して、大きな変化がもたされることを私は心から願っています。

☆ささげ物に関する神の方程式

パウロはコリント人への手紙の中で「ささげ物」について話をしています。特に、Ⅱコリント8－9章に記されていますが、エルサレムの教会にあって非常に貧しく困難な中であつたクリスチャンたちのために、コリントの教会が約束していたささげ物が確かに与えられるようにと、その励ましと指導をするために、パウロはこの手紙の2章を裂いてお金の話をして行くのです。そして、私たちはその箇所、

神の方法に基づいて繁栄へとつながって行くその道筋、その方程式というものを見出すことができるのです。Ⅱコリント9：6－15、そこでパウロは私たちに、クリスチャンが持つことができるすばらしい繁栄の生涯、その約束を私たちに教えてくれます。私たちは今朝、そして、来週、2週をかけてこの箇所を見て行きます。そして、それを通して私たちは神が私たちに計画しているように、私たちが豊かになり、私たちが繁栄をして行くことが出来るように、そのような生き方を私たちが実践して行くことが出来るようになればと願うのです。興味ありますね！

Ⅱコリント9：6－15「私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。：7 ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいませ。：8 神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。：9 「この人は散らして、貧しい人々に与えた。その義は永遠にとどまる。」と書いてあるとおりで。：10 蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたにも蒔く種を備え、それをふやし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。：11 あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。：12 なぜなら、この奉仕のわざは、聖徒たちの必要を十分に満たすばかりでなく、神への多くの感謝を通して、満ちあふれるようになるからです。：13 このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく与えていることを知って、神をあがめることでしょう。：14 また彼らは、あなたがたのために祈るとき、あなたがたに与えられた絶大な神の恵みのゆえに、あなたがたを慕うようになるのです。：15 ことばに表わせないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。」

1. ささげる聖書的原則 6 節

どうすれば、また、何によって、私たちは繁栄して行くことが出来るのか、実際的に祝福されるのだろうか？その方法とはどのようなものだろうか？これらの問いに皆さんはどう答えますか？間違いないことは、この世は私たちにきつとこのように言うでしょう。皆さんもあるいはこのように考えておられるかもしれません。「私たちがより多くのものを持つためには、できるだけ使わずにたくさん蓄えることだ」と。貯金をして、支出を減らして、そのお金をいろいろな投資に回して稼ごう、得ることによって私たちは財産を殖やして行くことが出来るのだと答えるでしょう。私たちが最近よく見るように、多くの人たちは何とかして少しでも利益を得ようと、様々な不正までして人から得ることを考え、それゆえに、自分たちが繁栄することができるというのです。

確かに、先程から言うように、多くの本が書かれています。経済的な繁栄をもたらすための様々な方法論というものが展開されています。それぞれ一つ一つ、その詳細は違いますが、けれども、みな同じ原則の下に動いています。それは「出来るだけ多くのものを得るなら私たちは豊かになって行く」という原則です。その方法論がどれ程違っていても、すべてがその部分においては一致しているのです。けれども、パウロは「それは違う」と言っています。パウロは私たちに、神は全く違う計画をもっていると言います。事実、神がもっておられる原則はその正反対です。6 節でパウロはこのように言いました。

「私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。」と、ここで言い表わされていることは「農業における自明の理」です。証明する必要のない明らかなことです。少ししか種を蒔かなければ、その刈り取りは少しだけです。多くの種を蒔くなら、多くの刈り取りを得ることができます。農夫が豊かな刈り取り、収穫を期待して多くの種を蒔くのと同じように、パウロが言うことは、クリスチャンが多くの収穫を得ることを理解して、教会や兄弟姉妹や、また、様々な働きの必要のために、自分の財を種を豊かに蒔くということです。私たちがより多くを蒔けば、私たちはより多くを刈り取るというのです。私たちがわずかしか蒔かなければ、私たちはわずかしか刈り取らないと言います。これが神の原則であり、神が言われる方程式だとパウロは私たちに教えるのです。皆さん、誤解しないでください。私がこれから言うことは、皆さんが一生懸命働かなければいけないということをお否定するものではありません。皆さんが賢く貯蓄しなければいけないということをお否定するのでもありません。皆さんが賢く投資をしなければいけないということをお否定するのでもありません。でも、神が私たちに教えることは、私たちは多くを与えるなら、多くを刈り取るということなのです。このことを私たちがよく理解するために文脈を見なければいけません。パウロがこれらのことを語って行く背景を知る必要があります。

先ほども言ったように、パウロはここで、コリント教会の信徒たちが約束していたこと、非常に困難な中、貧困の中で苦しんでいたエルサレム教会の聖徒たちに対して、支援の献金をして彼らを励まそうとしていたと語っています。それが確かに集められて、それが豊かに用いられることを願って、パウロはその指導をしていたのです。コリント教会の人たちに対して、その支援の動機付けをするのです。パウロは彼らに対して、まず最初に、8：1－9でマケドニヤの教会の模範を示すことによって「こんなにすばらしい模範があります。だから、あなたがたもこのように与えるべきです」と言います。そして、

8 : 10 - 9 : 5では、パウロは様々な指導をすることによって、励ましを告げることによって、彼らが豊かに蒔く者となることができるように、しっかりとその約束を果たし、神が喜ばれるささげ物をささげることが出来るようにと勧めるのです。そして、この9 : 6 - 15でパウロは実際にクリスチャンが、コリントの信徒たちが、神が求める献金、捧げ物を豊かに為すときに、どんなにすばらしい祝福がそこにあるかということ告げることによって、彼らが間違いなく「それなら私は是非ともしたいです」と、そのような思いをもって献金をして行くことが出来るようにと指導しているのです。

そこで私たちは「豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。」ということばを見つけるのです。収穫量はどれ程の種を蒔くかによって決まります。それと同じように、私たちがどれ位ささげるのか、どれ位与えるのかということが、私たちがどれ位受けるのかを決めるとパウロは言うのです。パウロは私たちが豊かに与えるときに、そこにある利益、収益は非常に大きなものになると言っているのです。この世が言うことと反対のことだと思いませんか？この世は「出来るだけ与えるな」、「出来るだけ捨てるな」と言います。それに対して神は「もっと与えなさい、そうすればもっと得られるから」と言われるのです。実は、このことはパウロが勝手に作り出した新しい原則ではありません。6節の初めに「私はこう考えます。」とあるので、皆さんはパウロ自身の勝手な意見かと思われるかもしれませんが、そうではありません。もし、勝手な意見なら、みことばとしてこのようには残っていません。でも、パウロは神が言われたことが何なのかを良く理解して、その真理に基づいて話を進めるのです。

たとえば、このことは旧約聖書にも記されています。箴言11 : 24 - 25「ばらまいても、なお富む人があり、正当な支払いを惜しんでも、かえって乏しくなる者がある。:25 おおらかな人は肥え、人を潤す者は自分も潤される。」、「おおらかな人」と訳されているこのことばは「たくさん与える人」を表わすことばです。豊かに施すことが出来る人です。実は、イエスもこのように言われました。ルカの福音書6 : 38「与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。人々は量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらうからです。」、当時のイスラエルの人たちは、男性も女性もみなドレスを着ていました。足下まである長い衣を着ていたのです。ここで言われていることは、当時の人がどのようにしてものを量っていたかということです。たとえば、穀物を買に行ったときに、彼らは自分のそのワンピースのスカートの部分を取って捲くり上げて、そこに量った穀物を入れてもらうのです。その時に、人々に与えるなら自分も与えられると言うのです。どのようにするのでしょう？量りをよくしてくれるというのです。普通は単に一杯分を入れるだけですが、それは衣に入れたものをさらに押しつけて、揺すって空気の入る場所をなくして、少しでも多く入るようにしてくれる、そのように与えられると言うのです。

ここでパウロが考えていたことは、使徒の働き20章で、パウロが引用しているイエスのことばであろうと思います。パウロは使徒20 : 35で、エペソの長老たちと彼がエペソにいた時にどのような働きをしていたのかということ話をしていますが、その中で、経済的な話をしている中で、特に、このようなことを言っています。20 : 35「このように労苦して弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、『受けるよりも与えるほうが幸いである。』と言われたみことばを思い出すべきことを、私は、万事につけ、あなたがたに示して来たのです。」、パウロは「主イエスご自身が、『受けるよりも与えるほうが幸いである。』と言われた」と言いました。私たちはどちらかというこの逆を考えませんか？「与えるよりも受けるほうが幸いです」と言うかもしれません。でも、神の原則を見たときに、それは「受けるよりも与えるほうが幸いである」なのです。これがまさに、パウロがこのⅡコリント9 : 6で言っている原則の基礎になっているのです。

このようなことを言ったパウロの根底には何があるのでしょうか？どこに祝福があるのかということです。私たちの祝福は受けることにあるのではなく、与えることにあると言うのです。そして、彼は言います。「私たちが豊かに与えるなら、それは大きな祝福となって私たちに返ってくる。私たちが豊かに蒔くなら、神がその収穫を豊かなものとしてくださる。」と。もしかすると、皆さんはこのように考えるかもしれません。「私たちが多くを得ることが出来るように、あなたは私たちにたくさん与えなさいと言っているのですか？」と。確かに、世の中には悪い人たちがいて、このような場所を使って皆さんに言います。「今、皆さんはお金持ちになるためにたくさん献金をしなさい。そうすれば、神さまがそれをみなあなたに返してくれます。だから、たくさん出しなさい」と。確かに、私が今言っていることは「皆さんが豊かに与えるなら、豊かな刈り取りがあります」ということです。その通り、皆さんが豊かに出すなら、皆さんは豊かに得ますということです。ただ、一つ違うことがあります。この後、これは来週話すこととなりますが、この箇所が私たちにはっきり教えることは、私たちが得ることを求めて豊かに与えるなら、それは神の祝福を得ることが出来る与え方ではないということです。私たちは得たいから与えるのではないのです。答えを先に言うと、私たちは与えたいから与えるのです。そうすると、より豊かに与えるために、神はより多くの収穫を私に与えてくれるのです。私たちがより豊かになると、私たち

はさらに大きなものを与えることが出来ます。そうすると、神は私たちにより多くの祝福をもって返してくれるのです。神の働きのために私たちが豊かに与えて行くようになると、神はそれを益々豊かにすることが出来るように私たちに与えてくれるのです。

皆さん、私たちの間違いはどこにあるのでしょうか？「私は今日、1,000円ささげるつもりだったけれど、2,000円捧げましょう。そうすれば、来週20,000円返って来て、私は18,000円自分のために使える」と、もし、そう思うなら、皆さんのささげ方が根本的に間違っています。皆さんの神との関係が根幹的におかしいのです。ですから、私が今皆さんと話そうとしていること、神が教えようとしていることは、皆さんが与えるなら、皆さんは豊かになりますということです。それは間違いありません！でも、それは皆さんが自分のために使うため、自分の欲望を満たすため、自分の願望をかなえるためにそのようにするのはではないのです。むしろ、そのようにするなら、皆さんには祝福はないでしょう。よく覚えてください。たとえ、皆さんがその全財産すべてを神にささげて「ほら、たくさん蒔いたでしょう」と言っても、皆さんの心が、それによって得ることが出来る収穫を、自分のためにどのように用いることが出来るのかと、その願望に満たされているなら、神は何一つ返さないかもしれません。そのことを私たちはよく覚えておかなければいけません。ただ、6節で私たちにはっきり告げられている原則、その方程式は「多くを蒔けば、多くを刈り取る。わずかし蒔かなければ、わずかし刈り取ることができない。」です。これが神の繁栄への方程式です。「与えなさい、豊かに与えなさい。」と。

2. ささげる方法 7節

では、実際に与えるに当たって私たちはどのような方法で与えるべきでしょうか？今少しそのことを話しました。パウロは具体的に、どのような方法で、どのように、どのような習慣をもって、私たちが神の前にささげ物をして行くべきかを教えてくれています。具体的に二つのことを通して、二つの角度からと言った方がいいかもしれませんが、パウロは教えてくれます。パウロは、私たちがどのようにささげるべきでないのかということをもっと最初に教え、そして、私たちにどのようにささげるべきかを教えています。原則は分かりました。豊かに蒔けば豊かに刈り取ります。では、どのように蒔けばよいのでしょうか？問題はそこです。パウロは言います。9：7「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいませ。」

1) どのような方法でささげるべきでないのか？

最初に、私たちに教えようとしていることは、いったい、どのように与えるべきではないのかということです。どのような態度でささげるべきでないのかということをもっと私たちに教えてくれるのです。パウロはここで二つの表現を使ってそのことを表わしています。

(a) いやいやながら

間違った与え方の最初は「いやいやながら」することです。この表現は直訳すると「苦しみの中から、悲しみの中、嘆きの中から」ということです。苦しみながら出す、与えたくないという思いのゆえに与える行為をしていても心が悲しいのです。いやなのです。嘆いているのです。「出したいけれど出さなければいけないから、私は苦しい」と言っ出すのです。ある注解者はこのように言います。「このような与え方をする人は、ささげ物をするときに傷ついている人、痛んでいる人だ。この人は自分がささげなければいけないということは分かっているけれど、献金袋が回って来ると苦しい。自分がお金を出さなければいけないということに深い悲しみを覚える。そして、そのお金と別れることが辛くてしょうがない。この人にとってはわずかを与えることは大きな損失をすることだと考える。」と。ささげたくないという心の内の態度の現われです。

(b) 強いられて

「強いられる」ということばは直訳すると「必要のゆえに」となります。先ほどの「いやいやながら」が心の内側の態度であるとするなら、これは外側からの圧力、周りからのプレッシャーです。必要に迫られて、無理強いされて、それが責任だからしょうがなくということ。同じ注解者はこのように言います。「このような心をもって与える人は、与えるときに他の人が自分の与える姿を見て何と思うだろうと考えながら与える人である。また、もし与えなかったら、もしささげなかったら、他の人がどのように思うだろうと思いつつながらささげる人である。もし、強制的にプレッシャーを感じているがゆえに与えるとするなら、その人は必要に迫られて、強いられてささげている者である」と。残念ながら、このようなことは多くの教会で見られることです。世界中のいろいろな所で、このような態度をもってささげている人たちがたくさんいます。このことは、まるで使徒の働き5章に記されているアナニヤとサツピラのようなことです。周りの目が気になって自分たちがどれ程ささげているかということに気を配るゆえに、間違った心をもってささげ物をしようとするのです。

これら二つの表現によってパウロははっきりと私たちに教えます。私たちが内側の痛みによってではなく、また、外側のプレッシャーによってでもなくささげ物をするべきであると。パウロはそのことを

コリント教会の人たちに警告するのです。このような態度、このような思いのうちにささげ物をしてはいけなく、そのことは今日見ている箇所直前のところ、5節にこのようなことばで記されています。

9：5「そこで私は、兄弟たちに勧めて、先にそちらに行かせ、前に約束したあなたがたの贈り物を前もって用意していただくことが必要だと思いました。どうか、この献金を、惜しみながらするのではなく、好意に満ちた贈り物として用意しておいてください。」「惜しみながらするのではなく」のところに*印が付いています。欄外に直訳として「食欲のようにでなく」とあります。パウロは言います。「食欲に支配されて、影響を受けてささげることがないようにしなさい。私はこのお金を持っていたいけれど、与えなければいけないから仕方がないと、悲しみのうちに嘆きのうちに献金をささげるなら、それは大きく間違ったささげ物だ」と。これらのことを簡単にまとめるなら、このようなささげ方は、保ち続けていたい、自分のものにしたい、自分のものでありたいという、そのような心の状態を現わしています。心の中が食欲に満ちているゆえに、「私は是非これを自分の物にしたい、これは自分の物だから」とそのような思いでささげ、それゆえに、そこには喜びがありません。与えたくないからです。神が与えようとしてくださる祝福を自ら断っているのです。パウロは言います。「そのような心でささげ物をささげてはいけなく」と。

皆さんはどうでしょう？そのような心でささげておられませんか？今日もここで献金袋が回りました。皆さんの心はどうでしたか？そこに入れたお金と別れることが惜しいと涙を流しながら献金袋に入れましたか？周りの人たちがどう思うだろう？とそのことを気にしながら献金袋に入れましたか？もし、その通りなら、皆さんはパウロが教える間違ったささげ物をしているのです。そのささげ物は神に祝されないし神に喜ばれることもありません。神はむしろそれを蔑まれます。

では、私たちはどのようにささげるべきでしょう？

2) どのような方法でささげるべきか？

パウロはこのように言います。「**心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。**」

(a) 心で決めたとおりに

私たちが与えるべき方法としてパウロが最初に教えることは、非常に簡素ですが非常に奥深い大切なことです。それは私たちが「**心で決めたとおりに**」することであり、

(b) 喜んで

そして、もう一つ「**喜んで与える**」ということです。

ここでパウロが言いたいことは「喜んで与える人とはどのような人か、その人はいやいやながらでなく、強いられてでもなく、むしろ、自分の心であらかじめ決めた額を喜んでささげる人だ」ということです。そして、7節の初めには「**ひとりひとり**」とあります。すべてのクリスチャンにこの責任があるということです。クリスチャンのみながそのようにするのです。喜んで与える人は内側にも外側にも強制も苦しみもないのです。喜んで多くを蒔こうとする人です。その人は心の内にこれだけの額を是非ささげたいと思いつつささげ物を携えてやって来る人です。この「**心で決めたとおりに**」ということばは、実は、「あらかじめ定める」という意味があります。つまり、ささげ物は回ってきたから瞬間的にささげるのではなく、私たちが自分の収入に相応しい額を、与えたいというその願いのもとにあらかじめ決めて、喜んでささげて行くことだと言うのです。自分の意志をもって、自分から計画的にささげて行くという目的があることを、はっきり表わすことばです。だから、「**心で決めたとおりに**」と言うのです。別の言い方をすれば、ひとりひとりのクリスチャンは、自分が決めた額を自主的にささげることが求められているのです。だれかが決めた額ではないのです。ひとりひとりが自分の心のうちで決めた額をささげなさいと言うのです。

皆さん、よく覚えておいてください。聖書は私たちに決められた額をささげなさいとは教えていません。残念ながら、多くの場合に、教会の中でも収入の10%という場合があります。十分の一献金は旧約聖書から取られているのですが、今ここでそのことを話す時間はありませんが、もし、旧約聖書が教えるように、旧約聖書の律法に基づいて私たちが十分の一献金をしようとするなら、私たちは全収入の23%位をささげなければいけません。旧約聖書の献金、この十分の一献金と言われるものは、何のためにそのようであったのかというと、この時代は神によって治められていた神政国家を支えて行くためだったからです。今の私たちの感覚から見ると、それは税金と考えるべきです。それによって国家が成り立っていた、それによって国に仕えていた祭司たちや、また、特に、貧困層にあった人たちが支えられていたのです。では、これと同じことが教会に求められているのかと言うと、皆さんよくご存じのように、新約聖書の中には10%をささげなさいという教えはありません。決まった額、決められた%でもないのです。新約聖書で私たちに求められていることは、私たちが自分に与えられているその範囲の中で、喜んで、犠牲的に、自主的に、豊かにささげることです。それは一人ひとりがあらかじめ心の内で決めた額なのです。

皆さん、具体的にどうなのかと思いませんか？10%と言われるなら簡単かもしれません。月の全収

入を見てその10%をささげなさいと言われるなら、自動的に10%、これ位ですと出すことができるでしょう。でも、聖書はそのようには言わないのです。ですから、皆さんによく考えていただきたいのです。あなたは喜んで、犠牲的に、自主的に、豊かに蒔いていますか？いやいやながらでなく、強いられてでもなく、喜んで犠牲的に豊かにささげていますか？

その具体的な例が、パウロによって上げられています。

3) 喜んでささげる人の心の態度 =マケドニヤ教会のクリスチャンの模範=

Ⅱコリント8章1節から8節に、パウロはマケドニヤの教会の模範を示しています。そこでパウロは、喜んで与える人たちの姿がどのようなものを私たちに明確に教えてくれるのです。

Ⅱコリント8：1-8「さて、兄弟たち。私たちは、マケドニヤの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。：2 苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。：3 私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、：4 聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。：5 そして、私たちの期待以上に、神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました。：6 それで私たちは、テトスがすでにこの恵みのわざをあなたがたの間で始めていたのですから、それを完了させるよう彼に勧めたのです。：7 あなたがたは、すべてのことに、すなわち、信仰にも、ことばにも、知識にも、あらゆる熱心にも、私たちから出てあなたがたの間にある愛にも富んでいるように、この恵みのわざにも富むようになってください。：8 こうは言っても、私は命令するものではありません。ただ、他の人々の熱心さをもって、あなたがた自身の愛の真実を確かめたいのです。」

(1) 神の恵みに基づいている

まず初めに、神の恵みに基づいた与え方だと言います。1節「さて、兄弟たち。私たちは、マケドニヤの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。」と、パウロは何を知らせようと思ったのでしょうか。「神の恵み」を知らせようとしたのです。それはマケドニヤの教会がどのようにささげたのかということです。つまり、別の言い方をすれば、神の恵みが現われるとき、それはこのような献金の姿となって出て来るということです。神の恵みに基づいて私たちがささげ物をして行きます。神の恵みを豊かに受けた私たちは喜んでささげる者になって行くということです。

(2) 困難の中にあってもささげる

2節「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、…」、神の恵みに基づいてささげる献金は、周りの状況に関係ないと言うのです。自分の置かれている状況がどのようなであっても、この人は「私はそんなに持っていないからささげることは出来ません」などと言わない人です。「私は可哀想だから、与えることよりも、むしろ、もらうべき人です」とは言わないのです。極度の貧困の中にあっても「神の必要のために、神の栄光が現わされるために、私は自分の与えられている分から喜んで、犠牲を払ってでも、たとえ、明日の食事がなくても喜んでささげましょう」と言うのです。思い出してください。してはならないささげ方は「いやいやながらに」ささげることでした。もし、私たちがささげるときに困難な状況でも「明日の食事がなくても構いません。喜んでささげます」というのであればその分をささげるべきです。しかし、「明日の食事がなくて困る、これをささげたら後はどうしよう。いやだな。」と思いつつささげるなら、それは取っておくべきです。でも、たとえ困難な状況にあっても神に喜ばれるささげ物をする人は、「私はこのような状況の中でも喜んでささげる」と言います。どのような状況にあっても、私たちがキリストがささげなさいと言われるなら、喜んでささげる必要があるなら、そこに必要を満たすことが出来る自分の能力があるなら、喜んでささげますと言うのです。

(3) 喜びをもってささげる

2節「彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、」。彼らは喜んでいたのです。貧困の中にあってもお金を出すなど考えられないことです。むしろ、私たちなら一生懸命自分の分を守ろうとします。でも、マケドニヤ教会の信徒たちは、神の恵みをよく理解していたゆえに「私はささげなければいけない。喜んでささげたい」と、喜びにあふれているから彼らは喜んでささげたのです。

(4) 惜しみなくささげる

2節「その惜しみなく施す富となったのです。」、次にパウロは彼らの与え方が惜しみなく施す姿に見えると言います。神が惜しむことなく私たちに与えてくださっているように、何よりも御子を与えてくださり、何よりも私たちに救いを備えてくださり、何よりもあらゆる必要を神が満たし続けてくださっているように、その神の恵みを知る人は惜しむことなくささげる人です。これは必ずしも巨額の富をささげることではありません。なぜなら、マケドニヤの人たちはそうではなかったからです。彼らは貧困の中にあつたのです。でも、彼らは純粋に喜びを持って自分の可能な限り惜しみなく施すのです。彼らの心は二つに分かれていなかったのです。実は、この「惜しみなく」ということばは「正直な、ひとつである」という意味があるのです。彼らの心は「与えること」と「自分の生活を守ること」の二つに分か

れていなかったということです。二つのことが一つになっていたのです。「与えたい」という心からの願いのもとに、彼らは惜しむことなく与えたのです。必要を満たしたいという、そのような一つの専心をもって彼らは与えようとしていたのです。

(5) 犠牲的にささげる

そして、彼らのささげ物は犠牲的なものでした。自分の能力に応じて、しかも、犠牲的なものだったのです。3節「**私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、**」、新約聖書は私たちに「自分の能力に応じてささげ物をしなさい」と教えます。一人ひとりに与えられる額は違います。神が与えてくださっている額は違います。だから、一率にこれだけを与えなさいと神は言わないのです。自分の能力に応じて、自ら進んで与えなさいと言われていました。私たちは自分が持っていないものを与えることは出来ません。だから、神は持っているものの中から与えなさいと言われてます。しかし、マケドニアの信者たちは自分の力以上にささげました。つまり、犠牲的にささげたのです。

(6) 自主的にささげる

また、喜んで与える人のその心の態度は、自ら率先してささげるものでした。「**彼らは、自ら進んで、**強制されたのではないのです。いやいやながら無理強いされたのではないのです。「これをしなかったら罰があるぞ」と脅かされたのでもありません。彼らは必要を見て、神の恵みが自分たちの内に働いているのを理解して、それゆえに、喜んで率先して自分の能力に応じて犠牲的に「します」と言ったのです。しかも、「**聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。**」と、皆さん、理解できますか？貧困の中にあつてマケドニアの信徒たちは、同じように貧困の中にあつたエルサレムの信徒たちに対して、ぜひ、ささげ物をさせてくださいとパウロに頼み続けたのです。「どうぞ、その働きに私を加えてください。私は持っていないけど、でも、持っている分をささげたいから、ぜひそのようにさせてください」と。

このことは、神への礼拝として、また、従順の証としてささげられました。そのことが5節に「**そして、私たちの期待以上に、神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました。**」と記されています。これは神への礼拝でした。そして、彼らはそのことを愛ゆえに為したことが8節のことばに見ることができます。「**こうは言っても、私は命令するものではありません。ただ、他の人々の熱心さをもって、あなたがた自身の愛の真実を確かめたいのです。**」、マケドニアの信徒たちの模範は彼らの愛の証です。パウロはこのことによってコリント教会の人たちに愛の行ないへの勧めを為すのです。

今日、私たちクリスチャンはどのようにささげ物をするべきでしょうか？パウロは言います。「喜んでささげる者になりなさい。いやいやながらでなく、強いられてでもなく、**心で決めたとおりに喜んでささげる者**になりなさい。マケドニアの人たちに倣いなさい」と。彼らが与えたように私たちは自らの意志をもって、自分の能力に応じて、犠牲的に、喜んで、どのような状況の中にあつても、神が与えてくださった恵みのゆえに、神への礼拝の行為として私たちは豊かに蒔き続けるべきなのです。

どうですか皆さん、皆さんはどのようにささげていますか？何よりすばらしいことは、神はそのようなささげ物に対して、豊かな報いを与えてくださるということです。神は皆さんを祝福したくてしようがないのです。神は皆さんに繁栄を与えたくてしようがないのです。なぜなら、皆さんに繁栄を与えるなら、皆さんはさらに喜んでより神の働きのためにささげ続ける者になって行くからです。もしかすると、多くの教会が苦しんでいるのは、このような豊かな蒔き方をしないから、いやいやながら強いられて、強制的に犠牲を払わずに、出来るだけ最小限をささげようとする人たちが満ちているからかもしれません。額が問題ではないのです。神は額のことは一切言われていません。神が言われることは「喜んで犠牲的に自ら進んでささげなさい」ということです。人の方程式は $10 - 2 = 8$ ですが、神は $10 -$ （皆さんが心に決めた額を入れてください）、それを 20 にも 30 にも 40 にもしてくださるのです。

H.P. クローウェルという一人の資産家がありました。彼はアメリカで非常に有名なキューカーウォーツというシリアル会社の創始者でした。彼は1943年に死ぬまで40年以上、全収入の70%近くを毎年ささげ続けたと言われてます。その彼が生きていたときにこのように言いました。「神さまは私がささげる以上に、いつも私に与え続けてくださった」と。彼は「豊かに蒔くなら豊かに刈り取る」というこの原則をよく理解していたのです。そして、この原則通りの人物でした。問題は、皆さんが神を信頼するかどうかです。約束を与えたのは神です。その方法も神が示してくれました。私たちが喜んで神にささげるときに、神は豊かな報いをもって私たちに返してくださいます。私たちはそれをもって、さらに神を称えることが出来ます。

来週、神がどんな約束を具体的に与えてくださったのか、それがいかにすばらしいものなのか、皆さんとごいっしょに見て行きたいと思えます。それを通して、私たちが益々喜んでささげ物をして行く、そのようなクリスチャンになるように、神が与えてくださっている繁栄を実際に経験しながら、喜びをもって生きて行く、そのような人物へと変わることが出来るように、心から願います。どうぞ、皆さん、

心を探ってみてください、喜んでささげる人物かどうか？